



TITLE:

# 母性神話の終焉とケア倫理の可能性

AUTHOR(S):

沢崎, 壮宏

---

CITATION:

沢崎, 壮宏. 母性神話の終焉とケア倫理の可能性. 京都大学文学部哲学研究室紀要 2005, 8: 94-108

ISSUE DATE:

2005-12-10

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/24235>

RIGHT:

# 母性神話の終焉とケア倫理の可能性

沢崎 壮宏

ナースが母性を象徴するという思い込みは、看護研究においてもはや真面目に取り上げられる話題ではないとしても、やはり一般的には根深いもので、看護実践においてそのような思い込みの効果を考慮に入れておくことは今後とも重要であるだろう。実際、看護実践のある教科書はその冒頭で、ナースに母性を象徴させる世間の思い込みについて覚悟するよう、その読者[未来のナース]に呼びかけている<sup>1</sup>。というも、母性を象徴しているからこそ、ナースは好かれもし、嫌われもする。いわゆる母性愛を期待する患者もいれば、その馴れ馴れしさこそが気に入らないという患者もいるのである。

しかしながら、他方で、その同じ世間が母性の存在を疑いはじめてもいる。「母性」という語が相変わらず普通に用いられつづけているとしても、その自然本性としての含意は随分と骨抜きになってしまったのであり、その永遠の普遍性も性とのアプリアリな不可分性ももはや真剣には受け取られていない。「父性愛」について論じられることさえ珍しくなくなった。ボーヴォワールが『第二の性 *Le deuxième sexe*』(1949)で「女に生まれるのではなく、女になるのだ」と叫んで以降、新大陸で女性解放運動が盛り上がり、フロイトの継承者たちが作り上げてきた女らしさの概念、受動的で、マゾヒストで、ナルシシストな女性という思い込みはその権威を失いはじめた。そして母性との結びつきの偶然性を暴き、その神話に止めを刺したのがエリザベト・バダンテール(Elisabeth Badinter)である。その処女作『付け足しの愛 *L'amour en plus*』(1980)は「母性愛が本能でない」と宣言し、フランスに大論争を巻き起こしたのであった<sup>2</sup>。

ところで、そのフランス社会における最近の重要な変革と言えば、パックスPACS (pacte civil de la solidarité)法[市民の連帯法]とパリテ(parité)法とをめぐって展開された一連の議論(1998-99)のことがすぐに思い出される。同性の「同棲カップル」にまで市民権を与えようとする前者にしる、政界の男女比率の等分化を図ろうとする後者にしる、そこに見出される、性別をキャンセルしようとする普遍化指向は、伝統的な性役割分担のドグ

マとの決別を高らかに謳っている。国民議会での可決の後、元老院ではバダンテールの議論が持ち出され、そしてパリテ法案は保守派から擁護されたのであった。バダンテールはこうして、現代フランス社会において、否応なく「普遍派」フェミニストを代表している<sup>3</sup>。

性差そのものを乗り越えてしまおうとする普遍主義 「市民を性や民族的差異でいくつかのカテゴリーに分けることは、普遍的かつ不可分な共同体の原理に反する」 は、しかしながら、共和主義の徹底あるいは普遍化のやり直し、と言い換えることもできるのであって、その意味では、最も伝統的な立場が伝統の破壊として現れてきている、という言い方もできる<sup>4</sup>。このようなパラドキシカルな事態について、国民国家(Etat-Nation)の解体とともに共和国(république)の理念そのものが変更を迫られ、超国家共同体[EU]の形成が徹底的にリベラルな社会変革を要求しているのだ、と考えて納得することもできるかもしれない。だが、そのような政治的な流れを後追いするような理解だけでは、伝統が伝統を破壊するというパラドックスそのものの面白さが分らない。

その面白さの秘密は、伝統そのものが作りものであることを暴き、リアルな基礎を欠いていることを告発することの中にある。バダンテールの議論の哲学的な価値はこの点にこそあって、それは、性役割分担のドグマに認められる社会構成的な性格をセンセーショナルに暴き出している。そのドグマによって女性に割り当てられてきた「母性愛」の弱々しさが何度となく強調され、簡単に消えうせてしまうものにそれでもしがみくことを余儀なくされてきた女性をその労苦と罪悪感とから解放しよう、というわけである。

そこでわれわれは、以下、『付け足しの愛』の論述に従って、その内的論理を浮き彫りにしつつ、バダンテールによる母性神話解体のプロセスを再現してみたい<sup>5</sup>。まず、最初のフェミニストを 17 世紀の才女[プレジューズ]に同定し、彼女たちが同時代の社会全体からどれほど嫌われていたかを見よう[1]。そのような社会的嫌悪のおかげで、18 世紀の女哲学者たちの努力はことごとく水泡に帰したのであった。次に、そのような嫌悪を正当化する神話として、ルソーが「自然」を持ち出してくる様子に注目する[2]。「自然」に基づく性役割分担は、その後、19 世紀には聖別されて宗教の教えとなり、20 世紀にはとうとう学問[精神分析学]にまでなった。

バダンテールの議論をこうして再現した後、われわれは漸くナースの話に戻ってくる。われわれは、最後に、母性神話が崩壊した後の社会において、その母性をそれまで象徴してきた[象徴するよう余儀なくされてきた]ナースに迫られている態度決定について考えて

みたい[結]。というのも、性役割分担がすでに流動化しはじめていることを指摘するバダンテールの、最後に投げかける問いがとても興味深い。彼女は、最後、そのような性役割のキャンセルが子供の心の発育に与える影響について問いかけ、結局のところ、その答えを保留している。性役割に差のない両親に育てられた子供は果たして、精神分析学が予言するように、心を病む悲惨な運命にあるのだろうか、それともアリストパネスの神話を実現するユートピアの住人[アンドロギュノス]なのだろうか。要するに、性役割分担のドグマを解体した後、その後の社会的役割の配分についてはまだ全くの白紙状態であり、だからこそ今、ナースの社会的役割あるいは社会的身分について考え直す絶好のチャンスなのである。

ところで、「母性」と呼ばれうるような本能があるか、という問いに、哲学史あるいは社会史の観点からアプローチすることにそもそも不満を覚えるかもしれない。それは臨床的に調査すべき科学的課題であって、文献の解読を通じて判定できるような人文的問題ではないという意見はもっともであろう。なるほど、どのような種類の本能　そのようなものがあるとして　があるか、その実在性について科学的調査の言い分に絶えず耳を傾けることが忘れられてはならない。だが、その言い分に盲目的に従わなければならない理由はないのであって、科学的な調査もまた時代状況や社会状況に強く影響されるということ、このことが過小評価されてはならない<sup>6</sup>。バダンテールの議論が正にそのことを暴き立ててくれている。

また、フランスの事例を取り上げることにしても不満を感じるかもしれない。だが、われわれの問題は母性の生得性を打ち消し、その普遍性を否定することであり、そして、普遍性を破壊するには一つの変則事例で足りる。なるほど、日本における切実な事例を取り上げて論ずることは興味深いが、それは今後の研究調査に期待したい<sup>7</sup>。

## 1. 最初のフェミニストあるいは女哲学者

子供に対する親の愛情の偶然性を暴こうとするバダンテールは、フランス社会史における間隙、伝統的に家庭を支配してきた父親　家父長制　が家庭におけるその主導権を失おうとしており、なおかつ、その後継者がまだ決まってない時代、を巧みに突いた。

父親の無関心に母親の関心が完全にとって代わるまでのその空白期間、子供たちは全面的な無関心に曝された、というのである。このような継承がスムーズに運ばなかったという事実こそが、そもそも、親のエゴイズムの根強さを証拠立てている。父親にしる、母親にしる、子供の世話を引き受けて、自分に固有の自由を進んで犠牲にしようとは夢にも思わなかった。

17 世紀、父なる神の権威を利用して絶対的な権力を私有しようとした偉大なる父(王権神授説)、国王の保護の下、ヨーロッパ中の富がフランスに集中し、ブルジョワジーは台頭する。そして、ブルジョワ女性が貴族女性の真似をすればするほど、貴族女性はブルジョワ女性との違いを強調しようとした。そのために追求された教養の研磨、礼儀作法の洗練はプレシオジテ*préciosité*と命名され、そのような潮流に乗ろうとする女性たちはプレシューズ*précieuses*と呼ばれた。この名は悪口としても流通し、才女を気取る女性は世間の物笑いの種であった<sup>8</sup>。モリエールの描くプレシューズ(『才女気取りの女たち*Les précieuses ridicules*』(1658)、『女学者*Les femmes savantes*』(1672)、...)はいつも滑稽だが、嘲笑的としての女学者というモチーフはすでにありきたりのものであったらしい。本物のプレシューズたちは、しかしながら、啓蒙の哲学者たちのアイドル、協力者あるいはライバルだったのであり、サロンの主催者として、その常連客として、人類の啓蒙に大きな一役を買うはずだった。だが、その功績が公に評価されることはなく、権力に結びつけられることのない知性は隠遁して「世紀病」を患い、メランコリックな生を営むしかなかった<sup>9</sup>。

教養を積み立てることに忙しいプレシューズたちが子供を育てたがらないであろうことは容易に想像できる。子育てが自己を大きく犠牲にする作業であることくらいは誰でも知っていたし、プレシューズほど自分を大事にしようとする女性はいなかった。実際、彼女たちは出産後すぐに子供を乳母に押しつけようとしたし、そこには一欠けらの罪悪感も認められなかった。バダンテールは、所詮は他人である乳母の不注意あるいは軽率さを指摘し、その危険はしかも承知されていたはずだと推論する。子供を乳母に預けることは、したがって、子供を捨てることとあまり変わらない。

バダンテールはこうして、母性にとって最大の裏切りであるはずの子捨ての容易さをことさら強調し、自分の子に対する「母親の無関心」を際立たせようとする。

<sup>8</sup>1780 年、首都パリでは、一年間に生まれる 21,000 人(総人口は 80~90 万人)の子供のうち、実

の母親の手で育てられるものは 1,000 人に満たず、住み込みの乳母に育てられるものは 1,000 人である。他の 19,000 人は里子に出される」(警察庁長官ルノワール氏がハンガリーの女王に宛てた報告、『プラス・ラブ』中に引用されている、p. 64)。

これがバダンテールのお気に入りの事例であり、このショッキングな数字が彼女の名を有名にしたようなものである。バダンテールは加えて、里子に出された子供が高い確率[二人に一人以上]で死の危険に曝されていたことを述べ立てて、追い討ちをかける。里子の習慣は、実際、都市ブルジョワジーの間で 17 世紀に普及し、18 世紀には都会のあらゆる階級、都市労働者の間にまで浸透したようである<sup>10</sup>。授乳を嫌悪する裕福な階級を真似て伝播していった「子捨て」という所業にとって、実のところ、経済的理由の役割は大きくなかったのであろう。その後、乳母の危うい手から漸く取り戻された子供はすかさず、今度は家庭教師に押し付けられ、その後、男の子は寄宿学校、女の子は修道院へと躊躇なく厄介払いされた。

17、18 世紀のフランスは、社会全体が子供に無関心だったということである。なるほど、文学は子供をモチーフにせず、小児医学もまだなかったし、寄宿学校や修道院は子供を厄介払いするためだけに存在するようなものだった。子供の健康に頓着する大人は少なく、農場や家畜の健康の方がずっと重大な関心事であった。しかも、見当たらないのは自分の子供に対する愛情だけでない。恋愛結婚などありえなかったから、夫婦の間にも愛の名に値するようなものなどなかったのであり<sup>11</sup>、要するに、この時代は全面的に愛を欠いていたのである。このような全面的な愛の不在は愛の本質的な偶然性を証明する<sup>12</sup>。だからこそ、愛は作られなければならなかったのであり、その任務を引き受けたのがルソーであった。

## 2. 性についての補完原理 性役割分担のドグマ

愛は作られるものである。だが、そもそも、愛はなぜ作り出されなければならないのか。愛を作り出そうとした社会はなぜ愛を必要としたのか。子捨てを奨励してきた 18 世紀はやがて、子供を君臨させる時代へと急反転するが、その反転を告知する『エミール *Émile*』は 1762 年に現れた。子供を巡って生じるこのような価値の反転については、

経済的な観点から説明することができる。

もっとも偉大なる父、太陽王の下、ヨーロッパ随一の大国となったフランスは「人口こそが国力である」ことを発見する<sup>13</sup>。官僚制度にしる、軍隊にしる、大国であることは多くの優秀な人材を要求する。労働に商品的価値が見出されると、労働力を取引しようとする重商主義者(mercantilistes)たちの下で人口動態についての調査が始まり、調査データを合理的に処理するための統計学(statistique)も整えられた<sup>14</sup>。「人口が停滞している」という神話がまことしやかに囁かれ、人口を増やす必要がますます真剣に受け取られた。労働資源である子供はこうして国家的関心の中心となる。フィジオクラート(physiocrates)たちはだからこそ、農業経営者や獣医の育成　その哲学的立場[重農主義]からして当然である

のみならず、さらに助産婦の教育にまで最大級の関心を払い、出産を近代化しようとした。富国強兵に邁進する国家にとって、子供はいまやもっとも有望な投資対象なのである。

乳幼時期の危険をくぐり向けた子供たちはさらに教育されて、立派な労働商品となる。教育がこうしてアンシャン・レジム期に大きな関心を集めたならば、『エミール』が多くの読者を獲得したのも当然の運命であった。「子供の君臨」する時代の始まりである<sup>15</sup>。この「君臨」は国家によって導入されたものであるから、その犠牲を国家が引き受けるはずもなく、そして、国家は男性により運営されていたから、結局、子供を君臨させるためのコストは全面的に女性に押し付けられることとなる。女性は、以降、子供の教育[道德教育=躾]の立役者として祭り上げられていく。その間、男性にはもっと経済的な役回りが準備されており、専ら富の蓄積にだけ励むことが期待された。

## 2.1. 『エミール』 18世紀における家族革命

家庭に性役割分担を持ち込もうとするルソーは、だからといって、オリジナルの議論を捻り出す必要はなかった。プレシューズこそが社会史における例外的存在者なのであって、彼女たちが社会全体からひどく嫌悪されていたことはすでに見た。ルソーはプレシオジテに先立つ伝統に立ち戻りさえすればよかったのである　« Retour à l'état de nature »。母親はずっと昔から子育ての責任者であった。それにしてもルソーの引き起こした家族革命が印象的であるとすれば、それは、家庭に「愛」が持ち込まれるからである。以前は、父親という絶対権力者の専制こそが家庭を支配しており、子供を厳しく監督する母親は、父親=夫によって同じように厳しく監督されていた。

『エミール』によって、家庭は支配の場から団欒の場へと一変した。団欒は両親と子供とで構成されるから(核家族)、必要不可欠の構成要素である子供が厄介払いされることはもはやなくなり、乳母を雇うことさえしなくなったルソー派の母親[プチ・ブルの女性]は自分の乳で子供を育てはじめる。母乳での子育ては医者に応援されることによって正当性を獲得し、発言権を強めつつあった医者はこうして母親を看護婦として利用することとなる。この時代、診断することを本務とする医者が回復の責任まで請合うことはなかったから<sup>16</sup>、子供の健康の責任の全体が母親の上に押し掛かってくる。女たちはこうして子供に縛られ、家庭に釘付けにされていく(「女性の囲い込み」)。

女性を利用しようとしたのは医者だけではない。かつて、原罪の全責任を女性 = イブに背負わせようとしていたはずの教会の態度は一変し、今度は女性の中にマリアを見つけようと躍起になる。女性は聖母となってこの世に救世主をもたらさなければならず、そのためには母親自身 「家庭の天使」 の厚い信仰こそが必要だ、というわけである。女性是这样して教会のリクルート活動の片棒を担がされることとなる。母親自身が良き信者となって自分の子供に聖書を読んで聞かせなければならず、その必要に見合う程度に限って、女性にも学問が奨励された<sup>17</sup>。聖母の存在理由が救世主を産み落とすことに尽きるのと同じように、女性の価値は良き母親となることに尽きる。

「人間の最初の教育は女の世話にかかっている。したがって人間の習慣も女次第である。[...]。だから、幼い人間を育てること、大きくなった人間の世話をし、助言を与え、慰めるのは、[...]、いつでも女たちの義務である」(『エミール』第5巻)。

聖母のイメージを背負わされた女性は道德教育の最高責任者となり、見本を示すべきその立場上、あらゆる種類のスキャンダルの種から遠ざけられた<sup>18</sup>。彼女たちのエゴイズムはこうして徹底的に抑圧されていく。大革命後、国民皆教育が始まって、母親の責任は決して軽くならなかった。公教育の責任は政教分離の名のもと知育(instruction)に限られ、躰 = 道德教育(éducation)の責任はやはり母親が全面的に背負ったのである。学校は女性たちにとってその母親ぶりを品評される場となり、それは自己献身の度合いで測られた。子育てに専念しないような母親は求められず、母親になることを拒否する女性はその存在そのものが求められない。良い母親である以上のことは最初から期待されておらず、母親になることを犠牲にするほどの野心を抱くことは自分を否定することに等



しい。そのような自己否定に基づく功績は笑われるか、無視されるか、あるいは、男にその栄誉を簒奪されるかのいずれかであった。

こうして見てくると、19世紀、自然であるはずの母性はその働きを宗教によって補完されたのである。ルソー派が母性の生得性をいくら叫んでみても、実のところ、悪い母親は後を絶たなかったらしく、それで、宗教が母親に最高の報酬を約束しなければならなかった、というわけである。「子育てで苦労した分はあの世で報われるから」と説得しなければならないほど、母親が自分から子育てに生きがいを見出すことは実は難しかったのである。このような宗教の介入は、しかしながら、逆効果でなのであって、補完されるべき自然が実のところ本物の自然でないことを暴き立ててしまっている。来世を持ち出して説得しなければ発動しない自然など「自然」の名に値しない。母性は、だから、改めて自然に基づけられなければならなかった。その必要に答えるのが、今度はフロイトであり、その精神分析学による答えはルソー以上にドグマチックなものであった。

## 2.2. フロイトの男根主義 マゾヒストとしての女性

『第二の性』に端を発し、大西洋を越えて 1960 年代のアメリカ合衆国を席卷した女性解放運動(women's liberation)のターゲットは精神分析学のドグマであり、その露骨な男根中心主義(phallocentrism) 「鋼鉄のファロス」 から女性を解放することが目指された。フロイトによってマゾヒストにされた女性は出産の苦痛に喜びを見出し、子育ての労苦にも笑顔で耐えなければならない。苦痛を経験することこそが彼女たちの心からの喜びなのだから。こうして、自然本性的な自己犠牲に支払われるべき報酬の必要は失われ、女性の苦しみは無視する都合のよい合理性が取って代わる。精神分析学は宗教よりも過酷である。その理屈は苦しむ女性の中に喜ぶ女性を見出すよう命ずる。苦痛そのものが報酬だ、というわけである。

男根主義信奉者の目から見ると、男根の欠如は不完全性の臨床的あるいは実証的な証拠であり、抑圧されるべき女性は、だからこそ、男根を欠いていなければならない

クリトリスは矮小化したペニスではないし、オーガズムは膣への刺激によって生じなければならない<sup>19</sup>。女性の本性を構成するマゾヒズムこそはその「ペニス羨望」の現れである。女性の苦痛への嗜好は身体的な欠如を埋め合わせようとする自然な欲求なのであり、その悲しむべき嗜好は母性の発見によって癒されなければならない。男根を節約した自然が母性でその埋め合わせをしようとしているのだから、母性を見出すことのできない女性の自然

は壊れており、その働きに不具合が生じている、ということになる。こうして、母親になることを拒否する女性は病人となり、罪のレッテルは病のレッテルに貼り替えられた。

だが、女性のマゾヒズムが男根主義を一貫して採用することの論理的な帰結であるとしても、そもそも、男根主義の採用そのものはどのようにして正当化されうるのだろうか。その採用が性役割分担のドグマの路線にあるならば、要するに、フロイトはルソーの主張を医学用語で言い換えて繰り返しているだけなのである。『エミール』以来、団欒の秘訣は明確な性役割分担の固定にあり、その割当てによって父親も母親も同定され、その同一性が安定していることによって、子供の心は健全に成長していくことができる、と考えられてきた。女性に割り当てられるべき母親という役に代役はありえない。オイデュプスを演じなければならぬ子供にとって、他の配役はすでに決まってしまうていなければならないのである。こうして、役割分担のドグマは精神の健全さを測る規範そのものとなる。

われわれはここで、性役割分担のドグマが富国強兵に邁進する国家において持ち込まれたことを思い出そう。そして、その国家がいつも男性によって代表されてきたことも。

### 2.3. 国家の介入 父権の弱体化

役割分担と言うと聞こえはいいかもしれない。分担する者同士で補完し合って全体を形成するわけだから、以降、分担者の一々が必要不可欠なピースとなる。『エミール』の持ち込んだ性に関する補完原理はなるほど女性にスポットライトを当て、女性を軽んじてきた家父長制の根強い伝統に深く楔を打ち込んだことになるのかもしれない。だが、そこで改めて女性に割り当てられた役割とは何であったか。伝統社会が女性に押しつけてきた同じ役割を、今度は合理性の名の下、女性は改めて背負わされることとなったのである。要するに、ルソーはプレシューズに対抗して、伝統を合理化しただけの話である。それまでの因習に合理性のセメントを被せて固めたようなものであり、その合理性の外観のせいで、女性はいよいよその汚れ役から逃れるわけにはいかなかった(母性の二重性あるいはパラドクス)。

男性のエゴイズムを補完させられるのだから、女性に残された任務は献身的、犠牲的な役回りばかりで、得な役回りはすべて男性に先取りされてしまっている。損な役回りを引き受ける女性は母親という権威を手に入れるけれども、「母性愛」という名の権力は自分を犠牲にする権限でしかない。それでも女性が権威づけられたのだとすると、それ

まで家庭内で権威を独占してきた父親との衝突は避けられないのかもしれない。父親はだから、その権力を篡奪されなければならなかった。男性はその父権を骨抜きにされ、関心を家庭の外に集中させはじめる。男が家庭を犠牲にして仕事に生きるとき、女は野心を犠牲にして家庭に生きることを余儀なくされる(ドメスティック・イデオロギー)。家庭はこうして母親の独壇場となる。と言っても、そこでの真の主役は実は子供であって「子供の君臨」、女性は自分を犠牲にすることで家庭を取り仕切るのである。

篡奪された父権は国家において集められ、今後、その国家の主催する学校教育を通じて子供はコントロールされる。家で出会うことの稀になった父親でなく、子供は学校教師を通じて世間を知り、大人になっていく。道德教育を担当する母親はいまや学校教師のパートナーであって、もはや父親のパートナーではない。このような父権篡奪のシナリオは、商業化する社会において、商業化を加速させようとする国家によって描かれた。伝統的な家庭は商業化の波に合わせて再編されなければならず、その再編の中心は労働商品となるべき子供の価値であった。子供の商品価値を効率的に高めるべき家庭へと再編される中、そこでの新しい役割が構想され、それは性別という自然の設定した区別に基づいて配分された。だが、果たして、自然の設定した区別に基づいて配分すれば、平等に配分することになるのだろうか。

## 結 母性を象徴する看護師？

子供の価値はどのように見積もられるべきなのだろうか。その見返りの大きさ次第で子育てに費やされるべき予算の大きさが決まり、そして、そのコストを賄うべき責任の分担も決定される。18世紀、商業化するフランス社会が子供の価値を高騰させると、それに合わせて社会全体が変革されなければならず、性役割の分担が再編され、男は家庭の外に、女は家庭の中に、それぞれ改めて配置され直した。プレシオジテの時代はそのような再編の準備期間に相当し、その間、裕福な女性は稀に自由を享受することもあった。

このように見えてくると、母性の偶然性を暴こうとするバダンテールの議論は、実のところ、子供の価値の周りを巡っている<sup>20</sup>。子供の価値が時代状況に合わせて相対的に決まるならば、その変化に合わせて、その価値を引き受ける責任の配分もまた変化する、

というわけである。問題はその責任の配分における公平さであって、公平な責任配分に基づく平等な社会をこそバダンテールは模索しようとしている。だから、彼女の関心はもっともプロパーな意味で倫理的なものなのであり、社会を存続させていく責任を配分することにおける正義こそが真の争点である。

バダンテールの診断によれば、子育てへのコストの割当を強化しようとした 18 世紀のフランス社会はその負担の配分において平等ではなかったのであり、その不平等こそが告発されなければならない。女性を騙して、子育てのコストを最低価格で賄おうとした男権社会は、そのため、平等を犠牲にすることを厭わなかった。それどころか、その不平等をごまかそうとしてきたのである。母性という名の自然が持ち出され、神話として信奉され、とうとう学問として権威づけられ、こうして不平等が拡大再生産され、強化され続けてきた。母性と呼ばれてきた自然が偽ものかどうか、そのような名に値する本能が本当に存在するのかどうか、そのような問いに答えようとしても無駄かもしれないし、あるいは、答えられなくても、実のところ、重要ではない。その存在が仮に臨床的に実証されようとも、プレシユーズたちがあれほど簡単に抑圧してみせた自然はもはやないに等しいのである。並大抵のことでは消えないはずだからこそ、本能の名で呼ばれる価値があったのだから<sup>21</sup>。

子供のために自己犠牲を命ずるような自然は存在しないのだろう。まして、女性限定でそのような自然が配分されているというのは男性にとって都合のよい思い込みでしかない。だが、子供のために何らかの犠牲が支払われなければならない必要を疑うことはできないのであって、その将来の構成員の育成に何らかのコストを割くことは共同体の存続にとって必要不可欠である。しかも、存続のみならず拡大までも望むならば、そのコストが小さくてよいはずはない。子供を養育し、文化的財産を相続させていく責任は共同体そのものの存続可能性の条件を構成するのであり、そのような相続の連続によって魂の永遠性を願うその成員にしてみれば、幸福を実現するための必要条件でもある(ディドロ)<sup>22</sup>。だが、そのような責任そのものは明らかすぎるくらい明らかであるとしても、それでも、それが自然であるわけではない。その責任は自然から与えられるものではなく、共同体を長く健全に運営していくための社会的要請、社会的生活を営む社会的存在者が自ら構成して自らに与える必要、と言うべきである。

女性が出産することは自然であるとしても、女性が養育の責任を一方的に引き受けることは自然ではない。解剖学的事実から子育てに関する規範を導くことの誤りを見抜く

ことが肝心である。実際、これこそ女性解放主義者たちの主張でもあって、「母親であるということにおいて、女の自由を保証する唯一の条件である、子供を生むことと、もっぱら女性が引き受けてきた子育ての作業とを分離する」ことが強く主張されてきた(生殖に関する女性の自己決定権 reproduction freedom)。だが、子育てのコストが賄われなければならないという事実は変わらないから、争点は、結局のところ、そのコストを負担する責任の配分における平等ということになる。

さて、われわれの住む社会は同じく、ケアのコストも賄わなければならない。そして、同じく、その責任の配分においては平等が尊重されなければならない。誰がケアのコストを賄い、誰がその実践の責任を引き受けるべきなのか。さらに、その責任の公正な分配のため、その遂行に支払われるべき報酬は何を基準に評定されるべきなのか。そもそも、責任配分における公平さとは何なのか。具体的な回答をここで与えることはできないけれども、いずれにせよ、社会的責任の配分における平等が尊重されなければならない。そしてそのために肝心なことは、偽りの自然を持ち出して、何人の自由の享受をも抑圧しないようにすることである。母親になることに向かない女性が無理強いされて不幸な子供や病んだ大人を作り出してきた「育児ノイローゼ」ように、無理強いされたナースは不幸な患者を作り出すだけかもしれない。

では、無理強いされたナースを作らないため、これまで母性を象徴してきたナースにもはや母性を象徴させてはならないということなのだろうか。象徴させないまでもなく、母性神話が終焉を迎えたのだから、ナースが母性を象徴することはもうありえないのだろうか。この問いに答える前に、われわれは一方で、ナースに何を象徴させるにせよ、ケアの必要の事実が変わらないことを忘れてはならない。その実践の責任は誰かに引き受けてもらわなければならないのである。誰かにこっそり押しつけることができないかぎり、その責任の配分においては平等が尊重されなければならない。だが、われわれは他方で、ナースが何を象徴するかによって、その実践に割り当てられる価値の重さが変わってくることを肝に銘じたほうがよい。ナースが母性を象徴し、母性の本質がマゾヒズムであるならば、ケアの重労働はアプリアリに女性に押しつけられ、しかも、支払われるべき報酬は労働の重さに比例してますます少なく見積もられかねない。

ナースは母性を象徴するべきなのだろうか。あらゆる女性にとってナースになることが天職であると、その語のプロパーな意味で言われるならば、われわれは反対しなけれ

ばならない。だが、それによってケアの責任が平等に配分されるならば、その実践の価値が正当に評価され、その犠牲が正当に償われることに貢献するならば、われわれは、その場合にかぎって、ナースに母性を象徴させることを許してもよいと結論したい。ただし、そこで象徴される母性が神話化されることのないよう、われわれはいつも警戒しなければならない。神話化を免れるためには、どのような種類のものであれ、自然を軽々しく持ち出さないことである。母性という名の本能が本当にあるかどうか、実のところ、そのような実証的データが決定的なわけではないし、実証的というレッテルに騙されてはいけない。データはどのようにでも利用できるのだから。社会的責任の平等な分配は、だからこそ、臨床で実証的に解決できるような問題ではないのであり、哲学者の発言する余地はここにこそある。ケアの倫理の可能性がここに切り拓かれているのである。

<sup>1</sup> 例えば、Martha J. Franklin 『フランクリンの英語で学ぶ看護』（メジカルフレンド社、2000）は、社会が看護師について抱くメタファーの筆頭に母性を挙げている：「看護は母性(mothering)のメタファーである。母親の行動はナースの行動に似ている。母親はケアし、慰め、触れ、看護する。ナースもまたケアし、慰め、触れ、看護する。大人は、しかしながら、自分が母親を必要としていること、自分が子供であることを思い出したがない。だから、世間の大人はナースといると居心地が悪い」(p. 4)。

<sup>2</sup> Elisabeth Badinter, *L'amour en plus – histoire de l'amour maternel, XVII<sup>e</sup> – XX<sup>e</sup> siècle*, Paris, Flammarion, 1980 ; 『プラス・ラブ 母性本能という神話の終焉』、鈴木晶[訳]、サンリオ、1981 [『母性という神話』と改題して筑摩叢書に収録されている]。

<sup>3</sup> もっとも、バダンテール自身はパリテ法案に反対で、他のインテリ女性たちとともにその反対のための誌上キャンペーンを展開した。

<sup>4</sup> フランス革命における平等主義の採用に父権社会終焉の決定的な契機を読み取るバダンテールによれば、その完全な終焉の完成には、その以降、200 年もかかった。ジェンダー革命の実現は 1970 年代のことである。その死へと向かう父権社会のゆっくりとした歩みについては、E. Badinter, *L'un est l'autre*, Odile Jacob, 1986 ; 『男は女、女は男』、上村くにこ・饗庭千代子[訳]、筑摩書房、1992 を参照のこと。

<sup>5</sup> われわれの関心は議論の内的順序にあるので、バダンテールの用いる時代考証の手続きそのものについては論じないことにしよう。われわれとしては、彼女の一次資料の取扱いがどのようなものであれ、社会史を実証的に構成するはずの数量化された資料を入手することの本質的な困難 行政による統計の作成以前については不可能と言いたいくらいである について忘れないでおくだけで十分したい。

<sup>6</sup> 「19 世紀医学のテロリズム」(heroic medicine)についてはすでに何度も告発されてきたが、そのような暴挙に科学的装いを与えた生命科学こそがそもそも女性身体の実権を巡るパワーゲーム[生殖の政治学 gender politics]の産物であった。ヴィクトリア朝の男性科学者が自分たちの理想の女性像を生物学的決定論に託して表現しようとした頭蓋測定学(craniology)は 19 世紀にそのパロッド時代を迎え その大衆化したヴァージョンが骨相学(phrenology)である 、90 年代にその後を継いだ性科学(Havelock Ellis, *Man and Woman*, 1894)が性差を極大化し、固定する効果を挙げたのであった。その影響は今日の社会生物学においてもなお根強いものがあると思われる。このような科学的性差論の火付け役とも言うべき進化論については、その生みの親ダーウィン自身によってというよりも、哲学者スペンサー(Herbert Spencer)によって大衆化され、世界中に普及したのであり、明治 10-20 年代の日本もその例外ではない。Barbara Ehrenreich & Deirdre English, *Witches, Midwives, and Nurses – A History of Women Healers. Complaints*

and Disorders – The Sexual Politics of Sickness, The Feminist Press, 1973; 『魔女・産婆・看護婦 / 女性医療家の歴史』、長瀬久子[訳]、法政大学出版局、1996、及び、Londa Siebinger, *The Mind has no sex? Women in the origins of Modern Science*, Cambridge, Harvard University Press, 1989; 『科学史から消された女性たち アカデミー下の知と創造性』、小川真理子+藤岡伸子+家田貴子[訳]、工作舎、1992、さらに、荻野美穂『ジェンダー化される身体』、勁草書房、2002、第5章「フェミニズムと生物学」を参照のこと。

<sup>7</sup> 近世日本の伝統社会が堕胎や間引きをかなり常套的に実践していた、という報告もあるにはあるが、そのような「子殺し」についての詳しい研究はまだ見当たらないようである。人口抑制策あるいは生殖コントロールの一形態としての「子殺し」については、キリスト教化される以前の地中海世界で広く行われていたらしく、こちらについてはすでに詳しい報告がある。例えば、上村くにこ「古代ギリシャにおける母性」、『現代人と母性』、松尾恒子・高石恭子[編]、新曜社、2003、p. 165-186を参照のこと。

<sup>8</sup> 「女学者という称号は一つの嘲笑である。そこから想像されるのは、何一つ知っていないくせに、知っていると思い込んでいる女、まがい物の知識をひけらかして皆を退屈させる女である。その上、このような女性は無作法な自惚れ屋で、ほとんど誇大妄想狂に近いと考えられていた」(E. Badinter, *Emilie, Emilie, l'ambition féminine au XVIII<sup>e</sup> siècle*, Paris, Flammarion, 1983; 『ふたりのエミリー 18世紀における女性の野心』、中島ひかる・武田満里子[訳]、筑摩書房、1987、p. 69-70)。

<sup>9</sup> 『ふたりのエミリー』を参照のこと。シャトレ夫人にニュートンの『プリンキピア』を仏訳させた動機は、彼女の[女性であるがゆえに]挫かれた野心を補償することであった：「勉強心は、男性が幸福になるためというより、女性が幸福になるためにこそ必要であるのは確かです。男性は、幸福になれる要素を無限にもっています。女性にはそれがまったくありません。男性には、栄光を獲得する手段もたくさんあります。自己の才能を国家のためあるいは同朋のために役立たせたいという願望は、戦争技術が巧みなことであっても、政治や交渉の才に長けていることであっても、それは勉強に対して向けられる願望よりずっと優れているとされています。しかしながら女性は、その社会的地位のために、あらゆる栄光の場から締め出されているのです。たとえ非常に気高い心を持った女性がいたとしても、女性であるがゆえにあらゆるものから締め出されたり、従属を余儀なくされた場合、彼女が慰めを得られるのは勉強しかないのです」(『幸福論』(Ed. des Belles Lettres)、1961、p. 21)。シャトレ夫人は、しかしながら、ヴォルテールの愛人としてしか記憶されていない。

同じような動機がデビネ夫人を教育学者にした：「行政や政治、商業に関する学問は、すべて女性に無縁なものとされ、禁じられています。彼女たちがそこに首を突っ込むことはできませんし、また、そうしてはならないのです。大雑把に言って、人々や国家、祖国のために実際に役立つのは、教育・学識ある男性もしくは学者だというのは、この理由からだけです。女性に残されているのは、文芸、哲学、芸術だけです」(「ガリャーニ宛書簡」、1771年1月20日)。そうは言っても、古典語を掘り下げて学ぶ機会も、遊学して見聞を広める機会も大部分の女性からは奪われていたのであって、よほど特権的な階級に帰属しているのでもないかぎり、女性はそもそも野心を抱くことすら許されなかった。デビネ夫人にしても、今ではグリムの愛人としてしか記憶されていない。

<sup>10</sup> 捨てられた婚外子を拾って養育する養育院の起源は中世にまで遡るらしいが(787、ミラノ)、1670年以降、慈善事業がパリの富裕階級で流行する 聖ヴァンサン・ド・ポールの乳児養育院は有名で、ルソーがその五人の私生児を送り込んだとされる と、それが誘引となって捨てられる子の数は却って急増し、過密化する養育院における乳幼児の死亡率はますます高くなった。婚内子であっても、その境遇が決して幸せなものでなかったことは本文の通りである。パリにおける乳母紹介所の歴史は13世紀にまで遡り、18世紀には市がヨーロッパ最大と言われる乳母紹介所を経営するまでになった。社会に深く根付いた里子制度が目立って衰退するのは「母性イデオロギー」の浸透以降、人口減少があからさまになった第一次世界大戦以降のことであり、人工乳の発明(1890年代)ですらその大きな制動力にはならなかった。荻野美穂『ジェンダー化される身体』、第7章「子殺しの論理と倫理」を参照のこと。

<sup>11</sup> 「二人は行動の自由を保つ。夫婦の貞節など、もはや問題でない。これが極端になれば、結婚自体が、恥ずべきもの、全面的な自由を制限するものと思われる」(Ives Durant, *Les Fermiers généraux au XVIII<sup>e</sup> siècle*, PUF, 1971)。「結婚なんてものはモンスターの所業(monstruosité)である」(ディドロ)。このようなリベルタンのイデオロギーの起源は12世紀に見出される：「愛は12世紀の発明である」。12世紀、トゥルバドゥールがその叙事詩によってヨーロッパ中に広めた宮廷風恋愛が一世を風靡したが、それは幾つ

かのルールから構成される恋愛ゲームであった。恋愛は夫婦間には成立しない；恋愛は、打ち続く戦闘や十字軍に出かけて留守がちな領主の夫人をはじめ、社会的に地位のある人妻と、彼女の夫に使える独身騎士との間にのみ成立する；人妻は恋人である騎士にただただ称えられ、奉仕される存在であり、恋人には常に気まぐれで尊大な態度で臨む。そして、彼女を恋慕う騎士は恋の奴隷となり、彼女のつれない振る舞いを“ルール”として受け入れ、ひたすら耐え、叶わぬがゆえの本物の恋に身も心も焦がす。井野瀬久美恵『意外な世界史 歴史を楽しむ発想法』、PHP研究所、1996を参照のこと。

<sup>12</sup> 「子殺し」の論理は現在もお生き残っているというべきであり、生殖テクノロジーを支配する優生学のアイデアはその最たるもので、私生児の生命が抹消される傾向にあることは殊更指摘するまでもない。

<sup>13</sup> 「国家は、人口が多く、製造業に従事する腕と国家を守る腕の数が多いほど、強力である」(Diderot, *Instruction pour les Sages-Femmes, Avant-propos*, 1770)。『百科全書Encyclopédie, ou Dictionnaire raisonné des sciences, des Artes et des Métiers』(1751)の編纂が製造業振興への貢献を狙っていた。ディドロはだからこそ、図版の刊行に関して一步も譲らなかった。こと、そして、フランスにおける産業革命(1830年代)に、あるいはエンジニアリングの誕生に現に貢献したこと、を思い出すことができる。

<sup>14</sup> コルベールが人口動態についての最初の調査を計画し(1663)、だが実際に調査が実施されたのはボーヴィリエ公爵によってであった(1697、1707)。

<sup>15</sup> Philip Aliès, *L'enfant et la vie familiale sous l'ancien régime*, Seuil, 1973；『<子供>の誕生』、杉山光信・杉山恵美子[訳]、みすず書房、1980年。

<sup>16</sup> 「お医者様に病気を治してもらいたがるなんてどうかしていますよ。先生方が偉い方にお仕えするのはそんなことのためじゃありませんよね。年金を頂戴してお薬を出すのがお医者様のお仕事で、病気を直すのはご本人の自己責任ですもの」(モリエール『病は気からLe Malade imaginaire』(1673)、『モリエール全集』第9巻、臨川書店、2002年、333-334頁)。

<sup>17</sup> 教師はだからこそサースと並んで女性的な職業となり、女性の社会進出の長らく唯一の機会であった。だが、女子の高等教育はそもそもその是非を巡って社会に大きな論争を巻き起こしたのであって、そのもっともドラマティックな顛末はアメリカ合衆国において見出される。Sadker, Myra & David, *Failing at fairness – how our schools cheat girls*, 1994；『「女の子」は学校でつくられる』、川合あさ子[訳]、時事通信社、2004、第2章「女は裏門から 女子教育の歴史」を参照のこと。

<sup>18</sup> ヴィクトリア時代のイギリスでもてはやされた「お上品さ」(victorian prudery)の影響力は世界的なもので、その性別規範は明治時代の日本にもかなり輸入されたし、今でもその影響は決して消えて失くなったわけではない。活動的な女性[お転婆]は「はしたない」と嗜められ、その「いやらしい」身体は徹底的に隠蔽されてきた。そうは言っても、母体の健康管理は国民国家の最重要懸案事項であったから、こっそり実践されるべき体操(スウェーデン体操+ドイツ体操)がわざわざ発明されて女子教育に導入され、そのための衣服としてブルマーも取り入れられた(井口あぐり、1903)。高橋一郎/萩原美代子/谷口雅子/掛水通子/角田聡美『ブルマーの社会史 女子体育へのまなざし』、青弓社、2005を参照のこと。

<sup>19</sup> ガレノスの権威が支配した中世までは生殖器に関する男女の相似説が優勢で、形態上の類似のみならず、その機能においても類似が強調されていた。女性器も精液を分泌する。近世以降の非相似説の巻き返しについては、科学的観察眼の洗練というだけでなく、観察者の心性の変化についても忘れてはならない。

<sup>20</sup> バダンテールの研究は、実際、アリエス『子供の誕生』を下敷きにしている。

<sup>21</sup> われわれはここで、豊穣な自然そのものを多産な女性と見なしたくなる衝動に騙されてはならない。自然の豊かさに対する驚きや賞賛があることは自然なことであろうし、そのような認識を土台にして「環境にやさしい」共同体を構想したり、その共同体全体の幸福の可能性を探ったりすることは興味深いことではある。そのような自然礼賛を、しかしながら、「母性」礼賛と読み替えるべきではない。

<sup>22</sup> 拙論「ケア倫理の可能性の条件としての唯物論」、*Prospectus*, No. 7 (2004)、p. 25-26を参照のこと。

(大阪教育大学非常勤講師)